

マレー半島における日蓮宗布教の一考察

安 中 尚 史

はじめに

東南アジアのほぼ中心に位置するマレー半島で、日蓮宗の布教が始まったのは、大正二年（一九一三）のことであった。当時の東南アジアは欧米列強諸国による植民地化が進められ、マレー半島もイギリスの統治下に置かれていた。

マレー半島の欧米列強諸国による支配は、一六世紀初頭のポルトガルの侵入に始まる。さらに一七世紀半頃にはオランダ領となり、一九世紀にイギリスの植民地となってからは、長期間にわたって形を変えながらも、イギリスの影響を受けて近代にまで及んだ。その後、昭和一六年（一九四一）の日米開戦により、日本はマレー半島へ軍事的な介入を始め、イギリス軍と交戦しながらおよそ二ヶ月をついやしてマレー半島の全土を掌握し、その状況が昭和二〇年（一九四五）八月の敗戦まで続いた。

明治時代に入り、日本人の海外渡航が様々な形態で繰り広

げられるようになると、各地に多くの日本人が移住を目的に海を渡ったが、その始まりについて次のような記述がある。

米国海岸は労働高く日本男子が甘んじて出稼したのであつて、敢て婦女子の賤業を先駆に發展する必要はなかつたのであるが、然も満州、支那、南方地方は労働低廉で劣等生活に甘んずる労働者が多いのであるから、特別の事情なき限り日本人の労働者を必要とせず、随つて婦女子の賤業が發展の先駆となつたのも是非なき次第であつた。⁽¹⁾

マレー半島へ日本人の移住にともなう渡航が始まったのは明治初年のことだが、ここで記されているような婦女子の賤業を目的としたものが当初は多かつたようである。さらに時代の経過とともにゴム栽培・鋤山・漁業・貿易・小売業などに関わる日本人の渡航が盛んとなり、大正九年（一九二〇）にマレーシア全域に在留する日本人は八、二七八人に及んだ。⁽²⁾ ちなみに、同年の各国・各地域在留日本人数は、北米合衆国一二五、四七六八・ハワイ一〇八、一〇九人・英国領カナダ一七、六六八八人・ブラジル三三三、四五六八人・フィリピン群島グ

アム島九、三三七人・ペルー五、九一〇人・支那五四、五四四人・満州一五〇、四六五人であった。⁽⁴⁾ここで掲げた国・地域の中で、マレーシアにおける在留日本人の数は決して多くないが、その差については日本の政策・渡航先国の政策・職種・賃金・生活環境などの相違によって生じたことであって、この数値が国・地域毎の盛衰を表すものではない。さらにマレーシアは先にも記したように、昭和一六年一二月から始まった日本による侵攻によって、軍の駐留もあつて在留する日本人の状況に大きな変化が見られたのは当然のことである。

マレー半島における日本仏教の展開

マレー半島における日本仏教の展開に関する研究は進展しているとは言いがたく、僅かに見られるだけである。その中でも大澤広嗣氏は、第二次世界大戦期におけるマレー半島を含めた東南アジアで活動した日本人仏教者・仏教学者、さらには彼らが所属する組織などの動向について考察され、成果を発表している。⁽⁵⁾また、柴田幹夫氏はシンガポールの本願寺の歴史と、本願寺が設立した日本語学校の実態について考察している。本願寺がシンガポールの日本人社会の中で、葬儀や布教などの日常の仏教寺院として重要な役割を果たしていたことは勿論のこと、日本語学校や慈善事業にも関わっていたことが紹介されている。⁽⁶⁾

マレー半島における日蓮宗布教の一考察(安 中)

マレー半島に初めて日本仏教の僧侶が入った時期について柴田氏の成果によると、明治二六年(一八九三)に曹洞宗の釋棟仙がインド仏跡参拝の途上にシンガポールに立ち寄り、その際に日本人墓地に埋葬されている死没者供養のために、在留を依頼されたことによると記されている。その後、明治四四年(一九一〇)にシンガポールを訪れた曹洞宗の日置黙仙(後に永平寺六六世、曹洞宗管長を歴任)から、釋教山西有寺の寺号を賜ったという。また、この間の明治三二年(一八九九)に、浄土真宗本願寺派の大谷光尊によって、本願寺派僧侶の佐々木千重がシンガポールに派遣され、通訳の佐々木芳照とともにヴェククトリア街に布教所を設立したことがわかる。

なお、上記二箇寺以外で戦前期にマレー半島に存在が確認できた日本仏教の寺院については、次の通りである。

シンガポール 妙法寺(日蓮宗)⁽⁷⁾

ペナン 本願寺(大谷派か本願寺派か不明)⁽⁸⁾

クアラルンプール 吉隆寺(宗派不明)⁽⁹⁾

クアラルンプール 詳細不明(前掲吉隆寺か不明)⁽¹⁰⁾

イポー 法華経寺(日蓮宗)⁽¹¹⁾

イポー 真言宗寺院(日本人墓地に隣接 詳細不明)⁽¹²⁾

スレンバン 光徳院(曹洞宗)⁽¹³⁾

さらに、現在でもマレー半島には日本人墓地が多数残され、平成一一年(一九九九)に在マレーシア日本国大使館が発行

した日本人墓地に関する記録によると二九箇所が確認でき⁽¹⁴⁾る。また、シンガポール西明寺の始まりが日本人墓地の死没者供養であったことから考えても、日本仏教の寺院設立と日本人墓地の関連が深いことは十分にうかがえる。

イポーにおける日蓮宗寺院の創設

先にも記したように、マレー半島における日蓮宗布教の始まりについては、大正二年（一九一三）のことであった。その設立の経緯について、『日宗新報』一三三一号は次のように紹介している。

馬来半島の本宗教会所 曾て本誌教報欄にて報道ありし、肥前大村町に莊麗なる本宗教会堂をば建立せし篤信家原口駒吉氏は数年前より馬来半島ペラークのイッポ市に在住し呉服雜貨商を営み頗る有力家なるが、先般濱井日成僧正を介して小生が贈りし書翰の同返信に因れば 当イッポ市は御案内の新嘉坡市を離る三百哩余の地にて少数の同胞も在住致し居り候、併し在留の邦人は重に島原、天草の出身にて真宗門徒多く日蓮宗は拙宅を除きては他に殆ど一軒も無之候間左様御承知下され度候、当イッポ市を距る五哩珈琲山と申す地に清き温泉有之候、殊に同所には美事な天然の岩窟有之候為め老後の楽みとして一箇月数回入浴に参り候へば又一般入浴者の行通便利をも謀り自費を以て道路を作り居り候処一昨年偶然日蓮宗の御僧日宗海外布教の目的にて当市に拙宅を尋ね下され候為め此御僧と協議の上右の岩窟を法華の道場となし巖龍寺と称へ居り候、御僧は一昨年より今に同寺に在住日々読経に余念

なく候、場所が温泉だけに参詣者も比較的多く依然小生が信徒総代の役を務め居り候、何れ御光来下され候節は御案内申上ぐべく候御僧は熊本県出身に馬場禎誠氏と申され候（上下略）と有り頗る本宗の為に尽力せられつ、在るは吾人大に意を強ふする者あり。殊に馬場師の如きは三十五六の青年にして暫く朝鮮に布教せられ居りし仁師なりと曰ふ。因に同師は今春上海本國寺別院より日蓮宗大学に入学せられ竹植龍海君の知人なる由孰れも宗家の為に賀すべき事なり。（岡教遂報⁽¹⁵⁾）

これによると、長崎県の大村町に日蓮宗の教会堂を建立した原口駒吉という篤信家が、マレー半島イポーの町で呉服雜貨商を営んでいる時に、偶然に海外布教を志して同地を訪れた日蓮宗僧侶の馬場禎誠と出会い、協議の上で寺院を設けたことがわかる。寺院の場所はイポー市内から五マイル離れた温泉が湧き出ているところで、そこにある岩窟を利用することになった。温泉ということもあって、参詣者は比較的多かった様子で、また原口が信徒総代を務めていたこともわかる。なお、馬場禎誠という人物については、熊本県の出身にして朝鮮で布教活動を展開していたらしく、年齢は三〇代半ばということ、管見の限りここに記されていることしか知ることができず、今後の調査を進める中で明らかにしていきたい。このイポーはマレーシア・ペラ州の州都で、首都クアラルンプールから北に二〇〇キロメートルほどの距離にあり、マレーシア第三の都市として位置づけられている。ペラ州はゴ

ム生産の盛んな地域で、多くのゴム園が設けられていた。大正八年（一九一九）の時点でイポー付近に日本人が経営するゴム園は三九を数え、古くは明治四四年に開園している。⁽¹⁶⁾ さらに当時のイポーの様子を知ることのできる文書によると次の通りである。

イッポー付近の在留同胞は百七八十名其中大部分は例の女である事は此処も多分に洩れぬ、市内の日本人は前記諸氏の他二三の雜貨店と僧侶と旅館三軒、散髪師及十数軒の妓楼がある。斯の如き状態に在る邦人間に何事でも協同一致の歩調が取れぬのは止むを得ぬ事である。而して少数の正業派の人々は例の一派と交わるを屑しとせずして彼等を排斥する。併し数に於て勢力がない。英官憲の同情はあるが金がない。反対側は多数である。金がある。社会組織がルーズな植民地での此の二異分子の円満な融合は先づ望むに難い次第である。而して此地では両派對峙して居るだけ紛騷も他地に比して絶え間ない。⁽¹⁷⁾

この文書によると、大正六年（一九一七）頃の在留邦人数は一七〇〜一八〇名ほどで、大正時代初期に日本人社会が既に形成されていたが、「正業派」と「賤業派」によって紛争が絶え間なかったことがわかる。共同墓地や寺院（共同墓地に隣接する寺院のことか）にいたるまで、具体的な内容は不明であるが、僅かな人数の日本人社会であっても、纏まりを持っていたわけではなかったようだ。また、別の文書に「廢娼後互に和親を計り」⁽¹⁸⁾とあり、大正九年（一九二〇）にマレー半

マレー半島における日蓮宗布教の一考察（安 中）

島の賤業者を一掃する動きがあったことから、⁽¹⁹⁾ 日本人社会に変化が見られたことも確かだ。また、ここで日蓮宗寺院の様子が少し触れられているが、参詣者で賑わっていた様子も知られる。

いっぽう、篤信家の原口駒吉については、その人物を紹介する文章が『日宗新報』に記載されている。それによると、肥前国大村の本経寺檀徒で呉服商を営んでいる原口駒吉・タツ子夫妻の篤信家ぶりが紹介されている。特にタツ子夫人は、夫と共にインドに渡って商売に励み、明治三七年には朝鮮、満州に支店を置くほどまでに規模を拡大して日本に帰国を果たしたという。さらに、日露戦争にあたってはタツ子夫人が一人で中国・インドにまで赴いて愛国婦人会の勧誘を行い、一万数千円という高額の募金を持ち帰ってきたという。また、大村の中心地に三千円余りの費用をもって、和洋折衷の瀟洒な布教所を建設して「日宗交道倶楽部」と命名した。その後、原口夫妻は再びインドに渡って、カルカッタで商売を始め、渡印後も護法扶宗のために経済的な援助が継続的に続けられた。そして、その資金を用いて、毎週日曜日に僧侶たちが交番で時勢に合った布教活動が行われるなど、原口夫妻の想いが形になって実践されていたことが理解できる。⁽²⁰⁾

日蓮宗寺院の展開

その後、馬場禎誠と原口駒吉、タツ子夫妻の動向については、管見の限り不明である。また馬場の後を受け継いだのは原智耀という僧侶で、大正四年一月からイポーで活動を開始していることから、馬場のイポーにおける活動は長くても二年であったことがわかる。

この原智耀がマレー半島に渡ってイポーにたどり着くまでのことや、イポーの洞窟寺院の様子について『日宗新報』一四一二号⁽²¹⁾に同紙を主宰していた加藤文雄が文書を寄せている。これによると、原の渡航は旅券や費用も無のまま、強い意志をもって何処にも許可を得ずに、密航という手段でマレー半島に赴いたことがわかる。その後、いったん帰国して国や日蓮宗からも認められて再度の渡航となった。当時、第一次世界大戦の真っ直中であって、西欧列強諸国の支配下に置かれていた東南アジア諸地域の中に、日本が進出する余地が生まれてしまったことも、渡航の許可に影響を及ぼしていることが考えられる。ドイツ領であった赤道以北の各地域(マーシャル諸島・マリアナ諸島・カロリン諸島など)を、日英同盟に基づいて第一次世界大戦に参戦した日本が占領したことにより、日本が「南洋」に進出する大きな足がかりとなった。本文中に「わが日本の国策として、『南進』の一語には」と

あり、時代に合致した布教の実践であることから、国のお墨付きを貰うことが適ったのであろう。

さらに大理石の大きな洞窟に設けられた寺院の様子が知られ、その名を巖龍山法華経寺と称し、熱帯の地域にもかかわらず地形の影響でか涼味掬すべき境地であることや、天然の温泉が常に湧きだし、蓮の花が咲き誇って幸せに満ちあふれている風情としている。洞窟内は数十畳の仏間が設けられ、そこに今回の帰国に際して国内の有志に援助を求めて揃えた仏具一式を厳かに飾り、日蓮聖人の尊像が中央に奉安されている様子などもわかる。また、原はイポーを訪れる前に、マラッカ海峡の北口の玄関として交通の要所となっているペナンで、ゴム栽培に従事する労働者であったことも記され、この地でイポーに向かう機会を伺っていたのであろう。

おわりに

その後の原智耀については、断片的な活動しか知ることができず、詳細については今後の資料調査の進展を待たねばならない。さらにイポーの寺院は須賀勝玄⁽²²⁾、岡教邃へ引き継がれ終戦を迎えた⁽²³⁾。

なお、イポーの寺院跡については、現在でも確認することが可能な状態にあり、マレーシア・ペナン一念寺の日蓮宗信徒たちが非常に興味を持っている。この一念寺は平成一四年

(二〇〇二)に日蓮宗の寺院として発足し、現地の華僑を中心とした信徒たちによって活発な活動が見られるが、イポアの寺院を継承しているわけではない。信者たちは自身の信仰する日蓮宗の寺院が、一〇〇年以上も前に創られていたことを驚いているとともに、この寺院のことを少しでも知って、自らの信仰のルーツを探り、その糧にすることを望んでいる様子である。

この寺院は先にも著したように洞窟を利用したことから、そこには建造物が残されているわけではない。洞窟内部に寺院の痕跡として、僧侶や信徒たちの文書が壁面に数多く残され、戦後七〇年近く経過した今日にまで見ることができるのは、稀有なことである。しかし、風化によって判読が困難になっている部分が多く、また、この洞窟は近年に建てられたホテル (The Banjaran Hot Springs Retreat) の敷地内にあり、一般に公開はされていないが、宿泊者が見学することは可能であり、故意に消されたりすることも予想でき、実際に最近の落書なども確認できた。いっぽう、ホテルの事情によって、この洞窟が今後、開発の対象となってしまうことも十分に考えられ、最悪の事態として文書が失われる可能性がある。

この洞窟に残る文書については、平成二五年(二〇一三)二月に調査を実施し、「当山開基／龍神勧請／大正二年九月／開山馬場禎誠／発起 原口駒吉／原口タツ／一天四海皆帰

妙法立正安国此土安穩／南無妙法蓮華經／南洋海珠馬來發珍大聖日蓮法華道場／大日本国大正四年十月十三日 教邃日□(花押)」「大正二年／九月吉日／開基／馬場禎誠」「鷺山江詣づる／道に法乃声／斯□不思議□／神のわざ可那／大正五年五月参拝／旭寛成(花押)」「奉祭祀八大龍王大善神守護処」他を確認した。

日本の南進政策に追随する形で本格的に活動したイポアの寺院は、まさに日本の太平洋戦争敗戦とともに終焉を迎えた。東アジアの国・地域における日蓮宗寺院の展開と同じような結末を迎えたが、種々の条件が重なったからこそ、洞窟内の文書を今日に至るまで見ることが適うのだろう。なお、この調査報告及び本稿で明らかにできなかった事柄については、別稿に譲ることとする。

- 1 南洋及日本人社編『南洋の五十年』一三五頁(昭和十三年六月発行、章華社)。
- 2 当時のマレーシア全域とは、英領海峡殖民地、英領馬來諸邦、英領北ボルネオを意味する。
- 3 外務省通商局編『海外渡航及在留本邦人統計 大正八年―昭和三年』三〇頁(昭和五年四月発行、外務省通商局)。
- 4 前掲同二九―三一頁。
- 5 大澤広嗣氏の成果として「第二次世界大戦下の仏教界と南進——真如親王奉讃会とシンガポール」(『仏教文化学会紀要』一九号、平成二三年三月発行)、「戦時期ビルマにおける宣撫活動と

- 日本人仏教者——上田天瑞を中心に」(『宗教学論集』二七号、平成二〇年三月発行)、「日本軍政下のマラヤにおける宗教調査——渡辺棟雄について」(『アジア文化研究所研究年報』四二号、平成二〇年二月発行)等がある。
- 6 柴田幹夫氏の成果として「大谷光瑞とシンガポール本願寺」(『仏教史研究』四三号、平成一九年一〇月発行)、「シンガポール本願寺と日本語学校」(『環日本海研究年報』一四号、平成一九年二月発行)、等がある。
- 7 南洋及日本人社編『南洋の五十年』五一二頁(昭和一三年六月発行、章華社)。なお『日蓮宗教報』四五号(昭和一四年三月一〇日発行)に寺院名が記載。
- 8 南洋及日本人社編『南洋の五十年』七〇四頁(昭和一三年六月発行、章華社)に僧侶名(本庄智童)と所属(本願寺布教師)が、また伊藤友治郎編『南洋年鑑第四回』二六頁(大正九年一一月発行、南公司南洋調査部)に僧侶名(本庄智童)が記載。
- 9 南洋及日本人社編『南洋の五十年』五七六頁(昭和一三年六月発行、章華社)。
- 10 伊藤友治郎編『南洋年鑑第四回』三四頁(大正九年一一月発行、南公司南洋調査部)に僧侶名(橋場悟庵)が記載。
- 11 前掲同三六頁に僧侶名(原智燿)が記載。
- 12 南洋及日本人社編『南洋の五十年』五五四頁(昭和一三年六月発行、章華社)。
- 13 前掲同五七九頁。
- 14 マレーシア各地日本人会編『マレーシアの日本人墓地及び墓碑——写真と記録で辿る先人の足跡——』(平成一一年一月発行、在マレーシア日本国大使館)。
- 15 『日宗新報』一三三二一号(大正四年五月二日発行)。
- 16 南洋及日本人社編『南洋の五十年』一九六〜一九八頁(昭和一三年六月発行、章華社)。
- 17 岩橋美蔵著『馬來半島縦断記』三八〜三九頁(大正六年一一月発行、私家版)。
- 18 南洋及日本人社編『南洋の五十年』五五四頁(昭和一三年六月発行、章華社)。
- 19 前掲同一五〇頁。
- 20 『日宗新報』一三二八号(大正四年一月三二日発行)。
- 21 『日宗新報』一四二二号(大正六年九月一五日発行)。
- 22 『宗報』二二二八号(昭和一〇年一一月発行)に須賀勝玄の活動の様子が記されている。
- 23 日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』六三五頁(昭和五六年一〇月発行、日蓮宗宗務院)。
- 〈キーワード〉 マレーシア、イポー、海外布教、日蓮宗
(立正大学教授)